

人材育成としての図書館コラボレーションの意義と効果的な実践方法

米澤 誠*

異なる組織間のコラボレーションを、職業人としての資質を高める活動として位置づけ、「チーム学習による活性化」「共通認識から創造する活動」「成果物の公開による社会貢献」という意義をもつことを明らかにする。そして、コラボレーションを効果的に実践するための、「会議革命」「図解コミュニケーション」「共同作業による OJT」という手法について解説する。

キーワード：図書館活動、コラボレーション、人材育成、キャリア形成、会議革命、図解コミュニケーション

はじめに

従来大学図書館では、図書館業務の電算化や機関リポジトリの実施など、ラインスタッフ的な組織では対応しきれないプロジェクト的業務を行ってきた。そのような状況では、組織横断的なワーキンググループやダイナミックに編成するチーム制組織により、課題解決を図る場合が多い。また、複数大学による機関リポジトリなど、近年は異なる機関の協同事業としてプロジェクトを実施する機会も多くなっている。

さて、このようなプロジェクト活動は、図書館のコラボレーション活動と位置づけることができる。では、これらのコラボレーション活動は、どのような意義をもつのだろうか。また、どのような手法により効果的に実践することができるのであろうか。

本稿ではまず、筆者が関わった具体的な事例を概観したのち、それにもとづき、コラボレーションが職業人としての資質を高めるという観点から、その意義について考察する。つづいて、コラボレーションの意義をさらに高めるために導入した、「会議革命」や「図解コミュニケーション」などの手法と効果について解説する。

1. コラボレーションによる図書館活動の事例

1.1 情報探索マニュアルの作成

はじめに、学内の図書館職員のコラボレーション事例として、東北大学附属図書館の『東北大学生のための情報探索の基礎知識』（以下『基礎知識』）の作成活動を示したい。この『基礎知識』は、2003年に初編を刊行し、その後『基本編』（2004年から）、『自然科学編』（2005年から）、『人文社会科学編』（2007年から）と範囲を拡張し、現在にいたっているものである¹⁾。

『基礎知識』はまず学内において評価され、その結果2004年度から全学共通科目「大学生のための情報検索術」の開

講を実現することができた。また、それら一連の活動が評価され、国立大学図書館協会賞（2005年度）を受賞した²⁾。『基礎知識』に先行する類書は多く、同書もそれらを参考にしたものであるが、『基礎知識』以降数多くの大学が同種の情報探索本を刊行したことからみても、大学図書館界に与えた影響は多大であったと考えている。それ以降も東北大学は、『自然科学編』をベースにした市販本の刊行を行う一方で³⁾、あらたに『人文社会科学編』を刊行するなど意欲的な活動を続けている。

学内の図書館・室の職員によるコラボレーション体制は、人事異動があるため毎回変更している。しかし、部編毎に編集者をおき、ワーキンググループ（以下「WG」）メンバーによる分担執筆と、メンバー全員による共同校正を行うという枠組みは変わらない。編集経験者が、次代の部編の監修校正を行うという体制も定まりつつある。なお、筆者が編集に関わったのは『自然科学編』までであり、本稿での論述はそこまでの経験によるものである。

1.2 図書館ガイドの作成

ついで、複数大学の図書館員のコラボレーション事例として、東北地区大学図書館協議会（以下「協議会」）が作成した『図書館のすすめ』の活動を示したい。これは、協議会の第60回総会の記念事業として、地区内の図書館職員が共同で執筆・編集したコラボレーションである⁴⁾。

『図書館のすすめ』は、東北地区のさまざまな大学図書館が共通して使えるように、「大学新入生」という利用者を想定した内容となっている。そして、前述の『基礎知識』よりもコンパクトで分かりやすく、全ページカラーの親しみやすい体裁に配慮した。2005年4月に初版を刊行したもので、いくつかの大学では、新入生向けの配布物として、その後もこの冊子を増刷りして利用している。

また、原稿はオープンソースという位置づけであったため、東北大学附属図書館工学分館では同図書館の利用者向けに内容を大幅に修正し、『図書館のすすめ』改訂版を刊行・配布している⁵⁾。

複数の大学職員のコラボレーション体制は、主に分担執筆を行う「編集執筆委員」8名と、編集企画と内容につい

*よねざわ まこと 山形大学学術情報基盤センター

〒990-8560 山形県山形市小白川町 1-4-12

Tel. 023-628-4209

(原稿受領 2008.11.21)

て意見を述べる「編集協力委員」6名によるものとした。執筆は少人数で短期間に行いつつ、より多くのメンバーの視点で内容チェックを行うことが、この体制の狙いであった。

このコラボレーションの任務は、『図書館のすすめ』の完成をもって完了したが、同メンバーを母体として、次のウェブサイト検討WGを設置することとなった。

1.3 ウェブサイトの作成

さいごの事例は、このウェブサイト検討WGである。協議会では、その活動を加盟館および他の図書館に対して公開するとともに、地区内の図書館間連携をさらに深めるために、公式ウェブサイトを開設するためのWGを設置した。『図書館のすすめ』などの成果物を公開することも目的の一つであった。

2006年1月にウェブサイトを開設し、その後、順次新たなコンテンツを付加している。特色ある試みとしては、加盟館ホームページの更新情報を一覧できるアンテナ機能、図書館界の最新ニュースを一覧できるRSS機能、図書館職員の研修予定の一覧リストなどがある。これらは、東北地区の図書館職員にとって、有用な情報源として機能しているものと考えられる。コラボレーション体制は、『図書館のすすめ』の編集執筆委員を母体とした8名のメンバーとなっている⁶⁾。

2. コラボレーションの意義

2.1 チーム学習による活性化

一般的にコラボレーションは、異なるスキルをもった人材が共通の課題を解決するために、お互いの能力を活用して成果を生み出す活動と位置付けることができる⁷⁾。しかし、コラボレーションに参画する者が十分なスキルをもっていない場合でも、その活動をする中でスキルを身につけていくことが可能であると考えられる。

『基礎知識』の場合も『図書館のすすめ』の場合も、それぞれのメンバーに向けたテーマを考えて執筆担当させることで、さらにスキルを伸ばすことができた。そして、お互いに忌憚のない意見交換をすることにより、さらにチームとしての学習効果を上げることができるのである。成果物を完成させるという課題解決を行うために、一つの目標に向かってチーム学習する姿勢を生み出すことが重要なのである。

日常的な業務体制から離れたコラボレーションでは、非日常的な活動であるがゆえに、リフレッシュした感覚で学習的な作業をすることができる。つまり、定型的な業務では行いにくいチーム学習が、コラボレーションでは通常のものとなるのである。特に、チーム学習を行いつつOJT(On the Job Training)的に作業を進めることで、資質向上を図ることができるのである。

2.2 共通認識から創造する活動

定型的な組織活動では、新しいアイデアは否定的に扱

われがちである。一方、課題解決型のコラボレーションでは、課題を解決するための創造的なアイデアを尊重する必要がある。

創造的なアイデアを生むためには、課題とその解決方向についてメンバー全員が共通の認識をもたなければならない。そして、共通の認識のもとで新しいアイデアを出し合い、優れたアイデアを実現する方策をさぐる必要があるのである。特に、マニュアルやウェブサイトなどの成果物の根幹となる構成を考える上では、この現状認識とアイデアの共有という作業は、非常に重要なものとなる。

例えば、『基礎知識』では、仙台みやげなどを紹介した「休憩コーナー」、仙台にちなんだキャラクター「みやぎのはぎこ」、異なるデザインの4種類のしおり、付録の略語表やフロアマップなどのアイデアを採用した。そして『図書館のすすめ』では、編集執筆委員の図書館の写真掲載、図書館に関する小説本文の引用などのアイデアを採用した。このような楽しいアイデアは、コラボレーション活動だからこそ採用しやすいものである。

2.3 成果物の公開による社会貢献

コラボレーションの成果は、参画したメンバーが所属する組織だけではなく、広く社会に公開すべきである。成果物そのものの有用性を伝えることも重要であるが、その成果を踏まえた次の成果物を生み出すためにも、社会に公開することには意味がある。そして、印刷物では成果の普及に限界があるため、電子的媒体で公開すべきである。さらに可能であれば原稿ファイルを提供して、その再利用を促すことが望ましい。

例えば『基礎知識』では、印刷物を配布するとともに、PDF版をウェブで公開している。また、原稿ファイルは、オープンソースとして提供可能にしている。『図書館のすすめ』では、印刷物を作成して協議会参加館に配布し、PDF版をウェブで公開している。さらに、原稿Wordファイルについても協議会参加館に配布しており、オープンソースとしての公開も検討している。協議会ウェブサイトについても、利用制限なしで公開している。

成果物を公開することで、第3者の評価を受けることも重要である。第3者の評価はコラボレーション活動の改善となるものであり、意欲の向上にもつながる。恐れることなく評価を受けるべきであろう。

3. コラボレーションの効果的な実践方法

3.1 会議革命の手法

コラボレーションでチーム学習を行うものとして、齋藤孝の提唱する「会議革命」の手法が効果的である。会議革命では、おきまりの案件の一方的報告の会議や、議論だけが飛び交いまとまらない会議を廃止し、課題解決に向けたブレインストーミングを行うことを提唱している⁸⁾。

会議革命では、会議の半分の時間は、2名1組となって課題解決に向けたアイデアを出し合う。残りの半分の時間で、全員でアイデアを報告し、その中から実践できる

ものを採用するのである。そしてアイディアの出し合いでは、お互いに否定しないというのが基本ルールである。またアイディアの報告では、ホワイトボードなどに書き出し、全員が共通の理解で議論を進めるのがポイントである。

この手法では、コラボレーションに参加する全員が、最大限発言の時間をもつことができる。また、2名1組や全体でコミュニケーションすることにより、お互いの考え・アイディアを知ることができ、チーム学習の効果が出るのである。アイディアを否定しないというルールも、全体が前向き思考で議論を進めるという効果を生む。

『基礎知識』や『図書館のすすめ』、協議会ウェブサイトの検討を始める際は、この会議革命の手法でブレインストーミングを行った。そして、ホワイトボードという共通議論の場で、成果物全体の構成について合意形成を進めることができた。このように、チーム学習におけるコミュニケーション手段として、会議革命は非常に有効な手法なのである。

3.2 図解コミュニケーションの手法

共通認識とコミュニケーションの手段として、ホワイトボードの活用は有効であるが、さらに図解を取り入れることにより、創造的なコラボレーションが可能となる。図解は多くの識者が論じているものであるが、筆者は久恒啓一が提案する「図解コミュニケーション」が最も効果的である⁹⁾。

ブレインストーミングでアイディアを箇条書きで羅列するだけでは、アイディア同士の相関関係や順番が明らかにならない。これに対し、アイディア同士を丸でグルーピングし見出しを付けることで、類似性と特性が明らかになる。また、矢印をつけて関係を書くことで、アイディア同士の関係が明確になる。さらに必要があれば、番号で順番付けする。

このようにメンバー全員で図解をしながらアイディアを整理することで、メンバーの共通認識を深めることができる。そして深い共通認識から、あらたなアイディアが生まれる可能性が高まる。どうどうめぐりの議論に終始するのではなく、このように共通認識からあらたな課題解決策を考えるという機運が、図解コミュニケーションによって広まるのである。

3.3 共同作業による OJT

『基礎知識』『図書館のすすめ』ともに、メンバー各自が Word を使用して原稿作成を行った。共通の作成方式で作業を行うことは、メンバー相互の技術的スキルを高めあう機会にもなった。特に『図書館のすすめ』の編集では、半日同一の作業場所で Word の校正作業を行うことを試みた。具体的な修正点と作業方法をコーチングする OJT の手法は、文書作成と編集レイアウトのスキルアップの方策として有効であったと考える¹⁰⁾。

Word で成果物を作成することで、PDF などの電子的媒体で公開することが容易となった。さらに、Word 原稿ファイルそのものの提供も可能となり、成果物の再利用の可能性が高まることになる。『基礎知識』や『図書館のすすめ』では、原稿ファイルを再利用する際の修正のポイントなどをまとめた資料も用意した。

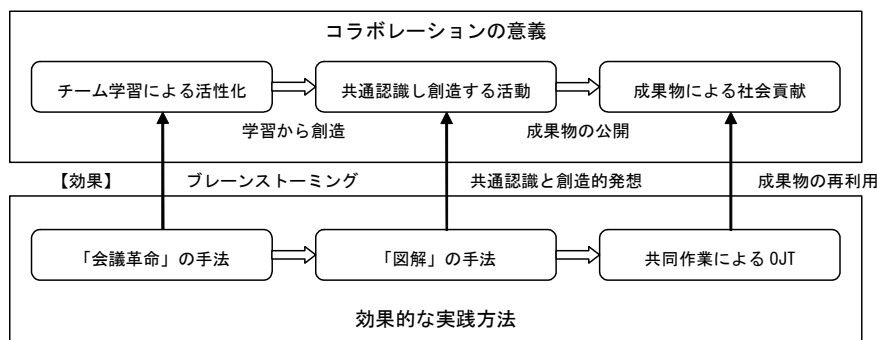
さいごに

図書館コラボレーションでの課題解決を行うために、ビジネス界で有効な会議革命や図解コミュニケーションの手法を導入し、いくつかの成果をおさめることができた。成果物である『基礎知識』や『図書館のすすめ』については、すでにいくつかの文献で紹介する機会があったが、そこにいたる過程の工夫については報告する場がなかった。本稿により、図書館の今後のコラボレーション活動に資するものがあれば幸いである。

ところで、人材育成の意義をもつコラボレーションは、実際の業務活動のみならず研修に応用しても有効である。本稿で紹介した会議革命や図解コミュニケーションの手法などは、これからの図書館員の資質向上には、欠かせない技能であると考えている。このことから、筆者が行う図書館員向け研修会では、これらの手法を積極的に実習プログラムの中に採り入れている。さらには、筆者が企画した 2008 年度明治大学図書館職員研修プログラムのテーマとしても取り上げることとした。

いずれの研修会でも、これらの手法はコラボレーションを活性化し、資質を高める手法として受講生に好評であった。それらの実施結果については、また稿をあらためて報告することとしたい。

さいごに、本稿で報告したコラボレーション事例での協



図解：コラボレーションの意義と効果的な実践方法

同メンバーおよび関係の方々に、この場をかりてお礼を申し上げます。

参考・引用文献

- 1) 東北大学附属図書館. 東北大学生のための情報探索の基礎知識. 2007. (オンライン)
<http://www.library.tohoku.ac.jp/mylibrary/tutorial/>
[accessed 2008-11-16].
- 2) 情報探索マニュアル作成を軸とした情報リテラシー教育の展開とオープンソースの試み. 医学図書館. 52(1), 2005, vol.52, no.1, p.25-30.
- 3) 学術情報探索マニュアル編集委員会. 理・工・医・薬学系学生のための学術情報探索マニュアル. 丸善. 2006.
- 4) 東北地区大学図書館協議会. 図書館のすすめ: 大学図書館利用ガイド. 2005. (オンライン)

<http://www.library.tohoku.ac.jp/tohokuchiku/susume.html>
[accessed 2008-11-16].

- 5) 東北大学附属図書館工学分館. 図書館のすすめ: 大学図書館を利用するための13章. 2007. (オンライン)
<http://www.library.tohoku.ac.jp/eng/refer/susume2007.pdf>
[accessed 2008-11-16].
- 6) 東北地区大学図書館協議会. 同ウェブサイト. (オンライン)
<http://www.library.tohoku.ac.jp/tohokuchiku/> [accessed 2008-11-16].
- 7) Anne Langley ほか. Building bridges: collaboration within and beyond the academic library, Oxford, 2006.
- 8) 齋藤孝. 会議革命. PHP 研究所. 2002.
- 9) 久恒啓一. 図で考える人は仕事ができる. 日本経済新聞社. 2002 ほか
- 10) 西戸雅博. 「図書館のすすめ」執筆体験記, 東北地区大学図書館協議会誌. 2006, no.57, p.3-4.

Special feature: Career development of librarians. Library collaboration as career training. Makoto YONEZAWA (Networking and Computing Service Center, Yamagata University, 1-4-12 Kojirakawa-cho, Yamagata-si, Yamagata-ken 990-8560 JAPAN)

Abstract: To clear the essence of collaboration with other organization, we examine the nature as activity of career training. Then we show the importance of library collaboration as activation by team learning, creative activity starting from common understanding, social contribution by open results. And we explain “Meeting revolution”, “Illustrating communication” and “OJT” to practice effectively.

Keywords: library activity / collaboration / career training